

「邪馬台国」はどこにあったのか

増山雄三

中国・魏（二二〇～二五六）の歴史書である「魏志倭人伝」に、倭の「邪馬台国」は女王の都する所で、七万余戸ばかりあるが、女王国以北には一大率（出先機関）を置いて諸国を統御し、彼女は常に伊都国にいて治めていたので、諸国はこれを畏怖したという。

倭国はもともと男子を王としていたが、二世紀後半に七～八十年に亘って乱れたので、人々は一人の女子を共立させて王とし、その名を「卑弥呼」といったが、彼女は鬼道（シヤーマン）としての能力が優れていたので、よく衆を惑わすと説明されている。

また邪馬台国の宮室は、楼観や城柵が設けられ、常に兵を持して守衛し、倭の三十余国の中では最も巨大であり、政治的機構も整っていたが、彼女は武力で諸国を制圧し君臨し

たのでなく、共立されたので、当初は政権の
基盤は脆いものだった。
魏志倭人伝で、邪馬台国の文字がでてくる
のは、この一か所だけで、この国があった場
所についても、他国からの方角や距離が、大
まかに示されているだけで、特定できない。
わが国では、邪馬台国の所在地に関して、
古くから論争が続いているが、いまだに定ま
るところがないのは、先の魏志倭人伝での記
載に、所在地を確定するには、内容が不十分
だからとされている。
しかし、この問題は、日本古代の国家起源
や性格、それに国土の統一時期や大和政権と
の関りのほか、記紀神話や伝承との絡み等も
あり、日本古代史研究上の重要な位置を占め
ているうえ、国民の関心も強い。
教科書などでも、長い間にわたりその場所
が、畿内と九州の両論が併記されてきたが、
近年、考古学の成果から、「畿内説」が有力
といった、踏み込んだ記述が見られる。

その根拠は、我が国の国家形成過程を握るという、奈良県桜井市の「纏向遺跡」の発掘成果で、ここは、三世紀初頭の奈良盆地の大和地方に、突然出現した集落遺跡だ。

そこでは、九州や関東ほか各地の土器が多数出土し、高度な鉄器生産の痕跡や、中国の神仙思想で不老長寿の象徴とされている、桃の種も見つかると共に、全域の面積が約一万五千平方メートル、列島最大規模である巨館跡、なども見つかっている。

また畿内説では、倭国の政治的混乱を打開すべく、福岡県のイト国や岡山県のキビ国などの国が連合して、新政権を作ったとされる纏向が、中心地に選ばれた背景に、東国への睨みが効く、地理的要因も考えられる。

また、この遺跡で出現した特徴的な前方後円墳が、全国にみられるのも強みで、この地で最大のこの古墳である「箸墓古墳」を、奴婢百余人と共に殉葬された、卑弥呼の墓と主張する研究者もいる。

それで、魏志倭人伝によると、卑弥呼は九州に出先機関である大率を置き、物資の流通も盛んになり、政治的に傑出したその姿は、纏向遺跡の発掘成果とも呼応している。

それについて、桜井市纏向学研究センターの寺沢所長は、「纏向は、ヤマト王権と呼ばれる九州から東北までを射程に入れた、倭国の政治の中枢だった。倭国の女王である、卑弥呼がいた邪馬台国も、この地と考えることが論理的だ」と強調する。

さらに、纏向に一大率が置かれた地は、福岡県糸島市のイト国とし、ここは、二世紀後半まで倭国の中心として繁栄したが、後ろ盾にしていた中国・後漢の滅亡で力を失い、岡山のキビ国などの新興国が台頭した。

そして、政治的混乱を打開するため、かつてのイトやキビ国などが連合して新政権を作り、その中心に地理的に東国への睨みの利く纏向が選ばれたというのが、纏向調査の最前線に立つ、寺沢さんの畿内説だ。

対する「九州説」では、福岡県南部から佐賀県南部に広がる、筑紫平野の複数の環濠集落が連携し、「邪馬台国連合」を形成したとの説が、近年になって注目を集めている。

福岡県小郡市埋蔵文化財調査センターの片岡所長は、魏志倭人伝には、邪馬台国が強権的な征服活動を行なった記述はないとし、複数の国が、卑弥呼を「共立」したとする記述と、発掘成果を照らし合わせた。

すると、筑紫平野の各環濠遺跡は、鉄や朱それに青銅器を、一カ所で独占して製造せず分担製造し、それらを、互いに供給しあった様子がうかがえ、さらに、平野を望む高台には、複数の監視集落の跡もあり、共同で外敵の進入を防いだ姿も見てとれる。

それで、筑紫平野に出来あがった邪馬台国連合は、卑弥呼の死後に衰退するが、三世紀後半以降、この地に前方後円墳が築かれることから、近畿のヤマト王権の影響下に入ったというのが、片岡さんの見方になっている。

それでも、魏志倭人伝の「七万余戸」という記述からすると、北部九州説は、スケールが小さいとの反論もあるが、各遺跡の成果を総合すれば、纏向を凌ぐ内容を持っている。そのうえ、卑弥呼が魏から与えられた金印などの決定打はなく、結論ははまだ出ていないものの、近畿・九州双方の、地道な発掘成果が議論の深化に繋がっていることは、まず間違いないと思われる。

ところで、邪馬台国の所在論争は、江戸時代に遡る事ができるが、儒学者の荒井白石は地名の発音から、筑後国山門郡を候補地に挙げているが、明治時代には、東洋史学者の内藤湖南が畿内説、白鳥庫吉が九州説を提唱。

さらに、記紀伝説の神武東征と絡め、筑紫地方で発達した勢力が、東方の大和に移ったとする邪馬台国「東遷説」も、和辻哲郎らによつて唱えられた。

魏志倭人伝で、卑弥呼が魏へ使者を送った際、下賜された「銅鏡百枚」を巡る論議もあ

るが、ただ、近畿地方の古墳で大量に出土した、卑弥呼の鏡ともいわれてきた、三角縁神獸鏡は、中国大陸では、一枚も発見されておらず、論争は続いている。

考古学では、望楼跡などが発掘された、佐賀県神埼市吉野ヶ里町の吉野ヶ里遺跡も、主祭殿なども復元されていて、いま候補地として注目されているが、片岡さんの九州説によれば、邪馬台国連合を作った、北部九州の環濠集落の一つではないかと見ている。

一方、纏向遺跡に近い、弥生時代の大規模集落である、奈良県田原本町の唐古・鍵遺跡についても、邪馬台国との関係が指摘されているが、それは、纏向遺跡に倭国の王都が造られる以前の、国の拠点とする説が有力だ。

いずれにせよ、この問題は日本国家形成期の重要な要となるので、東アジア世界の中で把握する姿勢を堅持しつつ、考古学での成果を、吸収していく事が解決の道だろう。

令和三年十一月